

## 連載

### 京都天文史跡めぐり【2】

～清少納言の見た星空 東山・泉涌寺～  
有本 淳一（京都市立塔南高等学校）

#### 1. 星空を見上げだしたのはいつごろ？

雲ひとつなく晴れ渡った夜に、まったくといってよいほど明かりのないところで星空を見上げたことがありますか？私はかつて観測のために滞在したオーストラリアの天文台で、そのような情景に出くわしました。あまりの美しさに息をすることすら忘れてしまったような感覚で“宇宙”を眺めていました。しばらくすると突然、何とも言いがたい恐怖感に襲われて、急いで宿舎に帰った記憶があります。満天の星空とはいろいろな感情を人間に引き起こさせてくれるものだと思います。

さて連載第2回目は、そんなさまざまな感情を引き起こさせてくれる星空についてです。古の都人たちはどのような思いで、この星空を眺めていたのでしょうか？それは前回も少し触れましたが、古くは忌み嫌うものと考えられていました。星の光は蛍の光と同様に死者の魂、すなわち人だまと思われていたようです。奈良に都があったころ、そして、京都に都が移って来てしばらくはこのような見方ももっぱらだったようなのです。いまの私たちとはずいぶん感覚が違ってきますね。

ではそんな感覚が変わってきたのはいつごろからなのでしょう？それは平安時代が中ごろにさしかかったころと考えられています。このころ編纂された日本最初の百科事典「倭名類聚抄」に星の名を見ることができます。「倭名類聚抄」は、三十六歌仙の一人である源順（みなもとのしたごう）によって、醍醐天皇の皇女、勤子内親王のために作られたもので、天部、地部、風雨部、神霊部、歳時部、官職部、動物部、草木部などという章立てになっています。星の名は、一番最初の章である天部に書かれていて、簡単な説明と日本名が記されています。例えば、「すばる（プレアデス星団）」のところをみると、「昴星 宿曜経云フ昴星ハ六星ノ火神也 音与卯同。和名須波流」となっています。他にどのような星の名が上っているのか、天部に書かれているすべての項目を拾い上げると次のようになります。

日、陽鳥、月、弦月、望月、暈、蝕、星、明星（火星）、長庚（金星）、牽牛、織女、流星、彗星、昴星、天河（天の川）

ここに上げられたものは当時の宮中や貴族たちの間でよく知られていたものという

ことができるでしょう。ただし、それを鑑賞したり、見て美しいと思ったかどうかは何とも簡潔な記述しかしていないこの文献だけからでは判断することができません。

## 2. 清少納言の見た星空

では、実際に鑑賞の対象としていたという証拠はどこに残っていないでしょうか。おそらく最も古い文献はかの清少納言が書いた「枕草子」だと思われます。「枕草子」は「倭名類聚抄」のおよそ 60～70 年後、西暦で言いますと 1000 年前後に書かれたといわれている平安時代を代表する文学作品です。清少納言が宮中での生活の中で見たことや感じたことを彼女のセンスで書き綴ったもので、特に“をかし”という美意識が多用されています。“をかし”とは、辞書によると“趣がある”などと表現されていますが、もっと端的な言い方をすれば、“素敵！”とか“すごい！”といった感情です。もう少し具体的に見ていきましょう。一例として「枕草子」の中で最も有名な冒頭部を紹介します。

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは 少し明りて紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ。螢の多く飛び違ひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

「春は、夜明けのあけぼのの頃がいいわね。だんだんに白くなっていく山際が、少し明るくなって、そこに紫がかった雲が細くたなびいているのなんかいいわ。夏は、夜がいいわね。満月の時期はなおさらよ。で、闇夜もなかなかいいわね。蛍がたくさん飛びかっているのもおもしろいわ。でも、1つか2つだけが、かすかに光ながら飛んでいくのもすごいわね。雨なんか降る日も素敵ね。」と、いった感じですが。このように彼女の感性にあったこと、つまり、鑑賞の対象となったものを特に取り上げています。この「枕草子」の中に“星は・・・”で始まる部分があります。

星は すばる。彦星。夕づつ。よばひ星、すこしをかし。尾だになからましかば、まいて。

「星は、すばる、彦星、宵の明星、流れ星がちょっと素敵ね。でも流れ星は尾がないともっと素敵なのに。」というように、星も“をかし”の対象として取り上げられています。長い間、どちらかという忌み嫌われてきた星もようやくここに来て鑑賞の対象となったということなのです。21 世紀の現在から振り返ると、日本人が星を鑑賞するという歴史はわずかに 1000 年ほどしかないということなのです。

「枕草子」の原文に戻って、取り上げられているものをもう少しよく見てみましょう。すばる(プレアデス星団)、彦星(アルタイル)、夕づつ(宵の明星、金星)、よばひ星(流れ星)の4つです。これらを見て気づくことはないですか?これらはどれも1つ1つの天体の名称です。つまり、全体としての星空や、大きな広がりを持った天の川といったものは取り上げられていないということです。「枕草子」が清少納言の個人的な感性から生まれたものであることは先ほども書きましたが、当時の都人たちの価値観から大きくずれたものではなかったのではないのでしょうか。ということは、星が鑑賞の対象になったとはいえ、現代の私たちのように満天の星空を眺めて宇宙を感じるというようなことはなかったのではないのでしょうか。そもそも私たちが抱くような宇宙の大きさや広がりといった宇宙観を当時の人たちは持っていなかったわけですから、これは当たり前といえば当たり前かもしれませんが、何か大きな感覚の違いを感じてしまいます。

他に「枕草子」を見ていくと、“月は・・・”で始まる部分があります。

月は 有明の、東の山ぎはにほそく出づるほど、いとあはれなり。  
「月は、明け方に東の山際に登ってきた細い形のが、すごくしっとりくるわね。」と、いった感じですね。この月に関する表現では、清少納言は“をかし”ではなく、“あはれ”を使っています。“あはれ”は、辞書によると“をかし”と同じで趣があり、心に深く感じることを意味しています。しかし、“あはれ”と“をかし”では決定的に情感が異なっていて、明るく新鮮で快い感じを表す“をかし”に対して、“あはれ”はしみじみと身のしみる感じを表しているのです。つまり、清少納言は星に対しては、“わあ、すごい!”と、いう飛び跳ねるような感覚だったようですが、月に対しては“いいわねえ・・・”。“と、いうしっとりとした感覚だったようなのです。確かに星のところには流れ星が含まれているので、一瞬だけ流れたときの、あのドキドキした感覚を彼女も持っていたのでしょう。また、月のところでは、日の出直前の冷たく張りつめた薄明の中に、上ってきたばかりの細く輝く月を物音ひとつ立てずに、息を殺して眺めるという経験を彼女もしたのでしょう。そして、もうすぐ新月となり、消えてしまう月のことを思うと、なんだか物悲しくなるのもうなずけます。このように考えると彼女の感性は現代の私たちにもすごく共感できるところがあるのではないのでしょうか。おそらく彼女は当時の都人の中で抜群に高い教養と、センスを持っていたのでしょう。それゆえに鑑賞の対象には不向きだった星のようなものもしっかりと見つけ、そして、その魅力を感じ取っていたのではないのでしょうか。ひょっとすると星の魅力を感じ取った最初の人だったのかも知れませんね。

### 3. 清少納言ゆかりの地

清少納言は一条天皇の時代に、その中宮だった定子に仕える女房として宮中に上りました。定子からの信頼も厚く、また、公卿たちと機知に富んだやり取りを行い、宮中で一目置かれる存在でした。また、多くの貴族たちとの親交もあり、華やかな宮廷生活を送ったようです。しかし、定子が出産時に亡くなってしまったことを受けて、宮仕えを辞し、摂津に下ったとされていますが、定かではありません。晩年は京都・東山の月輪のあたりにあった亡き父の山荘で暮らしたと言われています。現在、その山荘がどこにあったかははっきりと特定されていませんが、おそらく泉涌寺のあたりではなかったかと考えられています。泉涌寺には、これにちなんで昭和 49 年に清少納言の歌碑が建立され、仏殿の横にひっそりと立っています。そして、その歌碑には、百人一首にも採られている次の句が記されています。

夜をこめて 鳥のそら音は はるかとも よに逢坂の 関はゆるさじ  
夕刻の泉涌寺からの下山の道すがら、西山に光る夕づつを眺めつつ、古の都人の情感に想いはせるのも“あはれ”なものではないでしょうか。

#### 泉涌寺

京都市東山区泉涌寺山内町 27

市バス「泉涌寺道」下車、徒歩 10 分



図 1 仏殿(中央)の脇に歌碑がある



図 2 清少納言歌碑